

## ハイデガーのスアレス論

——存在論への新しい道

的場 哲朗

「スアレスこそ、近代的な哲学にもっとも強く影響を与えた思索者である。」

(ハイデガー)

はじめに——スアレスの哲学的功績とは

スアレスの名前は法学の世界ではよく知られているらしい。らしい、と思わず書いてしまったのは、当方、恥ずかしながら、彼の業績はおろか、彼の名前すら知らなかったからである。早速、手元の百科事典で調べてみたところ、彼は、十六世紀のスペイン神学によって得られた自然法的、国際法のおよび国家哲学的認識を集大成した著書「法につい

て」(一六二二年) によって「国際法学樹立者の一人」と目され、グロティウス(一五八三—一六四五)——近代自然法学の父ないし国際法の祖と謳われている——の先駆者であると評価されており、法学の世界では相当に著名な人物であることがわかった。<sup>①</sup>そして、本学の図書館に彼に関する研究書が二冊、そして論文と翻訳が所蔵されていることもわかった。<sup>②</sup>

彼、すなわちフランシスコ・スアレス(Francisco Suárez, 1548-1617) の数ある功績の中、特に彼の哲学的功績、とりわけ存在論に関する彼の功績に光を当てたい、というのが本稿の狙いである。

以下、煩雑な話が続きそうなので、ここで結論を先取りすることにした。スアレスは、古代ギリシアの哲学者アリストテレスの『形而上学』以来二千年以上に亘って綿々として続く西欧的存在論の歴史の中で画期的な新しい道を切り開いた、したがって、西欧哲学の歴史の中で決定的な一歩を歩み出した人物であり、二十世紀において存在論の新たな提唱を試みるドイツの哲学者マルティン・ハイデガーをして、「スアレスは、近代哲学にもっとも強い影響を与えた思索者(Denker)である」(GP, 112) と言わしめた人物なのである。では、その画期的な新しい道とは具体的にどのようなものであろうか。以下、主としてハイデガーの論述を手掛かりにしてスアレスの哲学的功績について論じたい。

論述は以下の手順で展開する。

一、ジルソンとハイデガーのスアレス論

二、二つの講義から見るスアレスの哲学的意味

おわりに——スアレスとハイデガーの存在の問い

## 一、ジルソンとハイデガーのストアレス論

ストアレスの哲学的功績とは何か、と切り出してはみたものの、哲学の世界でとりたててストアレスの名前が知られているわけでも著名なわけでもない。いやむしろ逆に彼の名前はほとんど知られていないといった方が正直なところであろう。その理由は、彼の主たる哲学的功績が、中世の神学者トマス・アキナスの名著『神学大全』の注釈という、我が国ではほとんど馴染みのない神学の世界の中での仕事であり、日頃慣れ親しんでいる西洋哲学史の概説書の中に彼の名前を探してみても、彼の名前も功績もまず見当たらない。

## a、ジルソンのストアレス論

ちなみに、中世哲学ということで、ジルソンの『中世哲学の精神』——上下二巻の、中世哲学史の分野では比較的名前の知られた概説書であるが——を調べてみたところ、ようやく上巻に一カ所、それも注釈(一!)の片隅に小さく彼の名前と功績が記されている。まずはその箇所を引いてみたい。

「その定式自体は、とくにストアレスによって批判を加えられているが、しかしかれはその区別自体を、すなわち神がそれ自身によって存在し、他のどんなものもそれ自身から存在を得るのではないということを否定しない。<sup>(3)</sup>」

該当箇所をそのまま引用したが、この文章を読んで即座にそこに何が書いてあるのかを理解できる読者は少ないに違

いない。この注釈が付けられている本文に遡ってすこし噛み砕いて説明すると、スアレスは、神において本質と存在が実在的に同一であるという哲学的定式を批判したが、しかし、神において本質と存在が実在的に同一であるというキリストの教説——親切にも、この教説こそキリスト教哲学の「基礎的真理」である、とジルソンは説明してくれている(有り難い!)——に対して疑問を懐くことはなかった、というのである。ジルソンが本書でスアレスに関して言いたいことは要するに、スアレスは、古代ギリシア以来の存在論の哲学的定式——その起源はプラトンやアリストテレスの存在論にまで遡るが——に対して批判を加えはするが、しかしキリスト教の教説それ自体に対して疑問を懐くことはなく、他のキリスト教哲学者と同様に、基本的に、プロチノス、アウグスティヌスからトマス・アクィナスに至るキリスト教思想の伝統の中にとっかりと留まり続けた、というのである。中世哲学では信仰と知識の対立が大きなテーマであったとよく言われるが、要するにスアレスは信仰の立場にとっかりとしがみついていた、というのである。

当然ここで疑問が湧いてこないわけではないが、ここでは敢えてそうした疑問は抑えて、要するに、スアレスは、古代ギリシアの存在論の伝統に遡って、本質と存在の問題に関して批判的な立場を取った、ということがわかればそれでよしということにしたい。

とはいえ、やはり疑問は吹き出してくる。ほんとうに当時、キリスト教思想の教説そのもの——本質と存在の実在的同一性という命題——に対して疑問を抱く者はいなかったであろうか。いや、もう少し突っ込んで、その疑問の中から、プラトンとアリストテレスの存在論に対して疑念を懐き、敢えて「彼らの道を踏み越える」<sup>(4)</sup>者はいなかったであろうか。ジルソンによれば、ギリシアの存在論とキリスト教思想の間には「何らの矛盾も存しない」<sup>(5)</sup>、いやそれどころか、キリスト教思想によって「ギリシアの形而上学が…決定的な進歩をとげた」<sup>(6)</sup>と書いているが、しかしそこにギリシ

ア思想とキリスト教の根本的対立を認め、この対立の中からギリシアの存在論に対して哲学の新しい転換を模索する試み等はほんとうになかったのであろうか。少なくとも、そうした試みの形跡くらいはあっても良いのではないだろうか。そうした疑問がふつと湧いてくるが、そうした疑問には目を瞑り、スアレスという哲学者はジルソンの注釈の中で軽く触れられ、プラトンやアリストテレスの存在論に対して批判的な態度を取った、というところで矛を収めることにしたい。

では、ハイデガーはスアレスをどのように評価したのであろうか。

#### b、ハイデガーのスアレス論

ハイデガーは『存在と時間』の中でスアレスに言及する。プラトンやアリストテレスの古代存在論を現代に改めて取り戻す必要性がある、というのがこの著作の狙いである以上、スアレスに言及することは当然予測できることである(はず?)が、しかし、不思議なことに、ジルソンと同じく、ただ一度――さすがに今度ばかりは注釈の片隅というわけにはいかないが、それでも――本論ではなく、序論、それも、未完の第二篇を予告する箇所ですらりと――つまり、よほど注意してかからない限り、誰も気付かないでさっと読み過ごしてしまうような簡単な――文章の中で軽く触れて終わっている。その箇所を引いてみたい。

「ギリシア的存在論はスコラ学的形態を取りつつ、本質的な点においてスアレスの形而上学的討論集を經由して近世の『形而上学』と超越論的哲学の内へ移行し、さらになおヘーゲルの『論理学』の基礎と目標を規定している。」〔傍点

訳者」

文章の晦渋さ、という点ではハイデガーもジルソンも甲乙付けがたいところであるが、その要旨をかいつまんで説明すれば、古代ギリシアの存在論はスアレスの「形而上学討論集」を經由して十九世紀初めのヘーゲルの「論理学」の中にまで色濃く影響を与えている、というのである。要するに、プラトンやアリストテレスの存在論は近代の哲学の中にまで強い影響を与えているが、その存在論の歴史のと真ん中、いうなれば、フルマラソンの折り返し地点にスアレスの「形而上学討論集」が位置している、というのである。ちなみに、形而上学的討論集とはスアレスの著作「形而上学討論集」(Disputationes metaphysicae, 1597) である。

先に述べたように、ジルソンはスアレスをキリスト教の伝統の中に位置づけ、スアレスはその伝統の範囲内に立ってギリシア的存在論を否定したに過ぎないと述べるが、これに対してハイデガーは、スアレスの存在論を古代ギリシア以来の西欧的存在論の歴史全体の中に据え直し、彼の存在論の試みをむしろ積極的の意味づけようと試みる。その意味づけを端的に言い表す言い回しが、「スアレスの形而上学的討論集を經由して……」という表現である。つまり、スアレスは、近代に至るまで綿々として受け継がれてきた西洋の存在論の歴史の中で決定的に重要な位置を占めている、とハイデガーは主張するのである。しかし、それにしては、『存在と時間』におけるスアレスへの言及は余りにも少な過ぎるのではないだろうか。なぜそれほどに少ないのであろうか。いったい少ない理由は何であらうか。もしかしたらハイデガーは、スアレスとの〈本格的な対決〉を覚悟して、敢えて第二部——残念ながら、未完に終わり日の目を見ることがなかった——の課題の方に回ってしまったのであろうか。つまり、先送りしてしまったのであろうか。

たしかに、そのように取れなくもない。何しろ、『存在と時間』第二部の課題は「存在論の歴史の現象学的破壊」<sup>⑧</sup>と予告されて、カントからアリストテレスまでの西歐的存在論の歴史全体の破壊が予告されていたからである。当然、その歴史のと真ん中にある——つまり、フルマラソンで言えば、ちょうど折り返し地点に位置する——スアレスの存在論との本格的な対決が繰り広げられるものと期待してしまうが、しかし、本書の「概要」見る限り、そのような計画も痕跡もまったく見当たらない。それどころか、本来スアレスが座るべき場所に「デカルト」が鎮座し、スアレスの名前も彼の著作も一切出てこないのである。はたしてスアレスの存在論はどこに行ったのであろうか。

いやそれどころか、「概要」を読むと、スアレスの存在論どころか、西歐存在論の歴史に対するハイデガーの見方そのものも変容してしまっている。右の引用文で、ギリシア的存在論(＝アリストテレス)ースアレス(の「形而上学討論集」)ーヘーゲル(の「論理学」)と展開するはずの存在論の歴史はいつの間にか(→)、カントーデカルトーアリストテレスという展開に置き換えられているのである(説明するまでもないが、この展開の順序(＝分析の順序)を時間の順序に書き直せば、アリストテレスーデカルトーカントという順番になる)。いつのまにかスアレスの名前は消え去り、ヘーゲルの名前も見当たらない。はたしてどちらの存在論の歴史がハイデガーの真意なのであろうか。引用文にあるように、「古代ギリシアの存在論ースアレスーヘーゲル」なのであろうか、それとも、「概要」の予告通り、やはり「アリストテレスーデカルトーカント」なのであろうか。後者だとしたら、先の引用文はどのように解したらよいのであろうか。ただ筆が滑ったことであらうか。それとも、ハイデガーの西歐存在論史に対する考え方の〈揺れのようなもの〉<sup>⑨</sup>がここに覗いているのであろうか。それとも、何か別の深い意図のようなものがそこに隠されているのであろうか。疑問が湧いてくる。

もちろん、いかなハイデガーといえど、数ある主張の中には矛盾もあろうし、齟齬や理路整然としない点も少なからず見受けられるに違いない。何しろ『存在と時間』は短期間に集中して執筆されたのである<sup>9)</sup>。しかし、ここで絶対に忘れてならないことは、ここで問題となっている事柄がハイデガーの歴史観に深く関わる、という点である。周知のように、彼の存在論は、ギリシア以来の存在の問いがその後西欧哲学史を通して忘却し続けられたという独特の終末論に駆り立てられており、後のいわゆる存在の出来事 (Ereignis) にしても、この終末論的な歴史観に裏打ちされて初めて成り立つ問題意識なのである。その意味からいえば、古代ギリシア以来の存在論の歴史の展開はハイデガー哲学にとつてまさしく試金石と呼ばれてもよいほどの重大問題であり、彼の哲学の、いわば拱門の要石と位置づけても良い問題なのである。その歴史観に〈揺らぎのようなもの〉が認められるとしたら、これはいったいどういふことなのであろうか。スアレスはいったいどこへ行つたのであろうか。まさか、筆が滑つたということだけではすまないはずである。やはり、何か深い意味がそこに隠されているのであろうか。

やはりここで、ハイデガーの文章に立ち戻って冷静に彼の主張を分析する必要があるであろう。

### c、「經由して」とは何か

もう一度先の引用文を読み返してもらいたい。ハイデガーは、「スアレスの形而上学的討論集を經由して」と書いている。「經由して」という言い方はいかにも意味深長な、持つて回つた言い回しでないだろうか。少なくともわたしにはそのように思えてならない。

はたして、「經由して」とはどのようなことをいうのであろうか。



「神は細部に宿る」(God is in the detail) という言葉がある(「より少ないことは、より豊かなこと」(Less is more) という言葉もあるそうだ)。ドイツ出身のアメリカの建築家ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエの言葉であるらしい。いや、アビ・ヴァールブルクの言葉だという説もあるらしいが、詳細は分からない。しかし、神、つまり真実は大きなところよりもこうした細かな言い回しの中に隠され、ほのかに覗いてくるというのは意外に真実をいっているのではないだろうか。とりわけ、ハイデガーの著作を読む際、そのように思えて仕方がない。というか、当方の勝手な思い込みかも知れないが、彼の作品の至る所にこうした伏線が敷かれていると思えてならないし、そうした伏線を発見し、その仕掛けを解き明かすことは彼の作品を読む上での無上の喜びであるとわたしは予てから思っている。

話を元に戻そう。

「經由して」の原語は *auf dem Weg über...in...* である。文字通りに訳せば、A から出発して途中Cを經由してBの中に向かうということであろう。「經由」を広辞苑を引くと、「経て行くこと。中間の場所・機関を通ること。」と説明されている。<sup>⑩</sup> この意味に取れば、先の引用文は、スアレスの著作「形而上学討論集」という中間の場所・機関を通るということを意味することになり、先程書いた、フルマラソンの折り返し地点という表現も満更捨てたものでもないということになる。岩波国語辞典では、「ある場所に行くのに他の場所を通って行くこと」とあった。<sup>⑪</sup> おそらくこちらの意味の方がハイデガーのこの表現により相応しいような気がするが、いかがであろうか。図式するまでもないが、A地点からB地点に向かうのに、直接B地点に向かわずに、わざわざC地点に立ち寄って行くことである。と解すると、「經由して」という言い回しは相当に意味深長な表現だということになる。少なくとも、いい加減な言葉ではない。いやむしろ、なぜその地点を經由したのであろうか。なぜわざわざその地点を經由しなければならなかったのであ

ろうか。經由することによってどんな〈アリバイ工作〉が行われ、どんな大切なことが隠されたのであろうか、といった疑問が——推理小説家ならずとも——ふつふつと湧いてくるはずである。

興味が湧いてきたので、参考までに他の翻訳二つを挙げておく。

一つ目は渡辺二郎の翻訳である。

「スコラのいう刻印をおされてギリシア存在論は、本質的な点では、途中、スアレスの『形而上学討論集』をへて、近代の「形而上学」と超越論的哲学のうちへと移行しており、さらにヘーゲルの『論理学』の基礎や目標をも規定している。」<sup>(21)</sup>

英訳だと次のように訳してある。

With the peculiar character which the Scholastics gave it, Greek ontology has, in its essentials, travelled the path that leads through the Disputations metaphysicae of Suarez to the 'metaphysics' and transcendental philosophy of modern times, determining even the foundations and the aims of Hegel's 'logic'.<sup>(22)</sup>

『存在と時間』におけるスアレスへの言及はただ一カ所と少ない。いや、少ないどころか、ほとんど気付かれないような、目立たない文章の中でざらりと触れられているに過ぎない。しかし(いや、だからこそ)、その意味深長な、

いかにも持って回った、「經由して」という言い回しの中に、スアレスという哲学者の思わぬ重要性が感じられて仕方がない(少なくとも、著者にはそう思えて仕方がない)。

やはり、腰を落ち着けてハイデガーのスアレス論に耳を傾けてみる必要があるだろう。以下、『存在と時間』が出版された年(一九二七年)を間に挟んで相前後して行われた二つの講義内容に着目してハイデガーのスアレス像を解明してみたいことにしたい。

## 二、二つの講義から見るスアレスの哲学的意味

ハイデガーにとってスアレスはどのような意味合いを持った哲学者だったのであろうか。この問題を解明する上で興味深い講義を彼はマールブルク大学で二度行っている。一つ目は、一九二六／二七年冬学期講義「トマス・アクィナスからカントまでの哲学の歴史」(Geschichte der Philosophie von Thomas von Aquin bis Kant)<sup>(14)</sup>「以下、本書から引用する場合はBd.23と略す」で、もう一つは一九二七年夏学期講義「現象学の根本問題」(Die Grundprobleme der Phänomenologie)<sup>(15)</sup>「以下、本書から引用する場合はBd.24と略す」である。前者は現在ハイデガー全集二三巻、後者は同全集二四巻にそれぞれ収められている。両講義が『存在と時間』の出版を間に挟んで相次いで行われたことはとても興味深い。ここではその問題には立ち入らず、直接スアレスの問題に向かうことにしたい。

まず最初の講義内容からはじめよう。

a、一九二六／二七年の冬学期講義「トマス・アクィナスからカントまでの哲学の歴史」の中のスアレス論

この講義の内容は、その題名の通り、中世のトマス・アクィナスから近代のカント哲学に至るまでの西欧的哲学（＝存在論）の歴史を辿り直すことにあるが、敢えてハイデガーは哲学史の通説を書き換え、近代哲学の始まりをデカルトではなく中世のトマスに設定し、その始原をさらにアリストテレスの「形而上学」にまで遡らせようと試みる。このような展開は、スアレスの存在論を追ってきたわたしたちにとって当然予想できる内容であり、その展開には大いに期待したいところである。ハイデガーは次のように述べる。「近代哲学一般の問題設定はただ中世に基づいてのみ理解される、しかも、存在に関する中世の一般的教説（存在、言葉、存在論）からのみ理解されうる。デカルトによって引き受けられ、ヘーゲルの論理学の中にまで影響を与えているその一般的教説の基礎の中で、「のみ理解されうるのだ」。(Bd.23, S.2)´ ㄱ。

このように、近代哲学の問題設定を中世にまで遡らせる試みは、周知のように、すでに一九一九年にホイジンガの『中世の秋』があり、これによってブルックハルト的な「暗黒の世界」としての中世観は払拭されており、それ自体としては殊更目新しいものではなく、むしろ時代の潮流に迎合したともとれなくはないが、しかし中世の源流をアリストテレスの「形而上学」の中に求め、中世と近代の哲学の中に古代存在論の色濃い臭いを嗅ぎつけた辺りはいかにもハイデガーらしい点であり、彼の嗅覚の鋭さだと思えてならない。彼の嗅覚の鋭さ、彼の直感力の鋭さを生々しく語る言葉が彼の自問とも独白とも取れる次の言葉である。

「なぜトマス「なのだろうか」。彼「トマス」の中で一般的形而上学が確定するからである。「彼の中で形而上学が確

定するとはいっても、) 彼独自の積極的な研究によってということではなくて、もちろん古代哲学を、しかもアリストテレスの古代哲学を完全な形態で広汎に確実に理解することによって、'ということである。'(Bd.23, S.2)。

つまり、先に述べた〈アリストテレス—中世—ヘーゲル〉という例の存在論史の定式がここにまた登場し、再確認されるわけである。先程、ただ手が滑っただけのことであろうか、それとも〈揺れ〉なだろうかと思いたが、ハイデガーはこの講義の冒頭でこの定式を再度確認しているのである。もちろん、この確認は——『存在と時間』でもただ一度しか触れていないことから察せられるように——彼の単なる直感であるに過ぎない。しかし、直感であるからこそ彼にとっては疑うことのできない「確信」であり、まさしく追求してみたい課題でもある。だからこそ、彼は、先に引いた、「デカルトによって引き受けられ、ヘーゲルの論理学の中にまで影響を与えているその一般的教説の基礎の中で」という言葉の後に、「[これは] 確信 [である]」——同時に一つの課題 [である]」(Bd.23, S.2)と続けるのである。先の存在論の歴史は、手が滑ったのでも、〈揺れ〉でも、まして不用意な発言でもなく、むしろ彼の「信念・確信」(Überzeugung) であると同時に、みずから辿り直し、証明すべきまさしく自分にとっての「課題」(Aufgabe) でもあるのである。

では、スアレスはどうか。当然、この講義の中で主題となるべき課題である(はずである)。私たちはそのように期待したいが、驚いたことに(いや、不思議なことに、というべきだろう)、講義はトマス、スピノザ、ライプニッツと進むが、スアレスはほとんど言及されない。なぜなのだろうか。まことにこれは不思議でならない。

とはいえ、少ないながら、スアレスに関する言及を拾い集めると次のようになる。

「こうした哲学的問題設定の区分は古代において素描されていた。トマスでもまだはつきりとは形式として確定されていないかった。ようやくその後。スアレス「によって確定された」1頁。」(Bd.23, S.4 □内は訳者)

「こうした哲学的問題設定の区分」とは、存在を存在者一般の存在と特定の存在領域の存在、つまり存在と存在者とに区分し、後者の存在者の存在をさらに自然、人間、神といった三つの存在領域に分ける考え方をいう。説明するまでもないと思うが、この区分から後に、存在論を一般形而上学 (metaphysica generalis) と特殊形而上学 (metaphysica specialis) の二つに大別し、後者の特殊形而上学をさらに合理的宇宙論 (cosmologia rationalis) と合理的心理学 (psychologia rationalis) と合理的神学 (theologia rationalis) の三つに分けるといふ伝統的な存在論の体系が作られ、カントもヘーゲルも、おそらく今日の哲学も、この体系を——無批判に——前提し、これを踏襲することになるのであるが、その存在論的体系の原点は何とスアレスの「形而上学討論集」にあった、というのである。つまり、古代の存在論の中でばんやりと素描されていた、存在と存在者の存在論的区別はスアレスによって明確に体系化され、その後の哲学の基盤もこれを基礎にして構築されているというのである。とすれば、スアレスは、アリストテレスによって素描されていた存在論を体系化しただけでなく、同時に、カントやヘーゲルの近代哲学の決定的な基礎を作り上げた、ということになる。とすれば、スアレスはとんでもない功績を残した偉大な哲学者だったということになる。

付録3の断片の中でも、これも同じ趣旨のことが繰り返される。

「存在についての学問の区分はトマスによって開かれ、将来的に保持される自由な体系性はスアレスによって「開か

れた)」(Bd.23, S.209 □内は訳者)。

アリストテレスが「形而上学」の中で素描した存在論はトマスに引き受けられ、そしてストアレスによって「将来的に保持される自由な体系性」を獲得した。とすれば、存在論の構築を目指すハイデガーにとって、なぜストアレスは形而上学を体系化せざるをえなかったのかという問いは避けて通れない重要な課題となろう。いったいなぜストアレスはアリストテレスの存在論を再構築し体系化しなければならなかったのであろうか。

「『形而上学』討論集」の初めで彼「『ストアレス』はアリストテレスの形而上学の脈絡のな~~き~~を見て知り、その内実を完結した体系性にもたらそうとしている。ストアレスによって、トマスに関して特徴付けられる形而上学の区分が確定する。形而上学書籍の「思考の歩み」からの解放。自立的な構築！(selbständiger Aufbau)、「ちなみに、「！」はハイデガー自身)」(Bd.23, S.4-5)

ストアレスはアリストテレスの「形而上学」という書物が一冊の書籍として統一的な「脈絡がない」ことに気づき、これを何とか「完結した体系性にもたらそう」とした。彼が完結した体系性にもたらしたおかげで、アリストテレスの存在論からの「解放」(Löstung)が生まれ、その結果、自立して存在論を構築する試みが可能となった(！)とハイデガーは述べるのである。最後の二節、「自立的な構築！」(selbständiger Aufbau)の「！」はハイデガー自身が書いている。この印は重要ではないだろうか。ハイデガーはおそらく、自分はストアレスの試みを正統に、つまりは自立的に、

継承したい!と述べているのである。もちろん、この一文だけでは断定しがたいところがあるが、本稿のように辿つてくると、どうしてもそのように結論したくなってくる。すなわち、ハイデガーはスアレスの正統な継承者だ、と。そこまで断定せずとも、スアレスがハイデガーの存在論にとって重要な意味を持つということだけは十分に分かっていただけのことと思う。

とはいえ、こうしたスアレス評価は必ずしもハイデガー独自のものでもないらしい。「形而上学討論集」を翻訳した小川量子は「解説」の中で次のように述べていることからすれば、こうした評価はむしろごく一般的な見方でもあったようである。

「アリストテレスの『形而上学』…が、テーマの反復と未解決な問題を含んでいることを不満として、そのテキストに即して註解するという従来の一般的方法を採らず、形而上学における体系的秩序を重んじながら、自ら必要な問題を精選し、古今の代表的な哲学者や同時代に至るまでのさまざまな神学者の論点を整理しようとしている。このような点においてこの著作は、それまでにない革新的な著作として単に諸外国のカトリック神学者のみならず、近代プロテスタントの諸学者にまで影響を与えることになる。<sup>16)</sup>」

学生時代神学を学んだハイデガーにとって、こうしたスアレスの評価は当然の熟知事項であったに違いない。とすれば、現代に存在論を構築しようとするハイデガーにとって残された課題は、右の最後の一文に、「ヘーゲルの論理学に至るまでの近代哲学にまで」という文言を自分の課題として付け加えることと、アリストテレスの存在論から真に「解



放」されて存在論を「自立的に構築」するという課題以外になかったに違いない。前者の課題についてハイデガーは『現象学の根本問題』の中で、神学的な問題に関する「こうした問いに私たちはここで直接関心があるのではなくて、遡って古代哲学の理解のために、下っては、カントが『純粹理性批判』の中で、そしてヘーゲルが彼の『論理学』の中で立てている問題のためである」(Bd. 24, S113)と述べ、古代哲学とカントやヘーゲルの近代哲学を結びつける接合点としてスアレスの「形而上学討論集」に注目している。後者の課題については、彼の『存在と時間』、及びその後の彼の一連の存在の問いの試みが鮮かに物語ってくれると言えよう。

スアレスの哲学に対するハイデガーの評価も引いておこう。

「スアレスは…カトリック内部の神学のより一層の発展に大きな影響をもっただけでなく、彼の修道会の同僚フォンセカとともに、十六／十七世紀のプロテスタント的スコラ哲学の教育にも強い影響を与えている。二人の徹底性と哲学的水準 (Gründlichkeit und philosophisches Niveau) は、たとえばメラントニオンが彼のアリストテレスの注釈の中で到達したものよりも遙かに高い (weitaus höher) とっさにある。」(Bd. 24, 112)

何度も言うが、『存在と時間』の中のスアレスへの言及は少ない。少ないどころか、一カ所、それも、目立たない文章の中でさりと触れられているに過ぎない。しかし、その「形而上学討論集を經由して」というさりげない言い回しの中には、スアレスがアリストテレスの(脈絡のない)存在論を「完結した体系性」にもたらしたのみならず、ハイデガー自身の新しい存在論への試みさえも切り開いたのだという思い——これは彼の「確信」であり同時に「課題」でも

あるのだが——が隠されていたのである。やはり、あの文章は意味深長な言い回しであったと言うほかないだろう。

はたせるかな、『存在と時間』第一部が出版された年に行われたマールブルク大学夏学期講義『現象学の問題』ではスアレスが積極的に評価される。すなわち、「スアレスこそ、近代的な哲学にもっとも強く影響を与えた思索者 (Denker) である」と評価するだけでなく、存在と存在者の区別 (いわゆる存在論的区別) もスアレスが最初に述べたと彼は述べるのである。夏学期講義「現象学の根本問題」のスアレス論を見ることにしよう。

#### b、講義「現象学の根本問題」の中のスアレス論

この講義の中で、ハイデガーがスアレスを詳細に取り扱うのは、長いタイトルが付けられた第二章の冒頭の節「第十節、このテーゼの内実とそのテーゼの伝統的な議論」の「a、本質 (essentia) と実存在 (existentia) を区別するため

の伝統的な問題連関の予描」である。

ア、近代哲学にもっとも影響を与えた思索者スアレス

スアレスは後期スコラ哲学の人であると説明をはじめた直後、ハイデガーはいきなり、「スアレスこそ、近代的な哲学にもっとも強く影響を与えた思索者 (Denker) である」と述べ、「デカルトは直接彼に依存しており、ほぼ隔々まで彼の専門用語を使用している」(Bd.241, 112)と続ける。スアレスはこの講義の中で突然、「近代的な哲学にもっとも強く影響を与えた思索者 (Denker)」と位置づけられるのである (この前の学期の講義では、近代哲学の始まりはトマスである、と主張されていた)。

続けてハイデガーはストアレスの功績を次のように簡潔に纏める。

「中世哲学を、とりわけ存在論を初めて体系化したのはストアレスである。彼以前、中世は、トマスもドゥンス・スコトゥスも古代をただ、逐語的にテキストを取り扱う注釈の中で取り扱うだけに過ぎなかった。アリストテレスの「形而上学」という古代の基本書は脈絡のある作品ではないし、体系的な構成も持っていない。ストアレスはこのことを見て取り、この欠陥 (Mangel) —— 彼はこのことをそのようにみなしたのだが —— を、彼が初めて存在論的問題を一つの体系的形式にもたらすことによって除去できるようにしようと試みた。この体系的形式によって、形而上学のひとつの区分は以降ヘーゲルに至るまでの数百年間規定された。」(Bd.241, 112)

『存在時間』の中でさらりと簡単に触れられた文章の内容が、そして一九二六／二七年の冬学期講義の中で断片的に触れられた事柄がここではつきりと、そして簡潔に、纏められる。アリストテレスの存在論はストアレスの「形而上学討論集」の中で体系化され、以降の、ヘーゲルに至るまでの近代哲学はこの体系によって規定されたのである、と。その意味でストアレスの「形而上学討論集」はまさしくフルマラソンの中間地点に位置するのであり、存在論の歴史において極めて重要な位置にあるのである。

そのストアレスの形而上学の区分は、先に述べたように、形而上学が一般形而上学と特殊形而上学の二つに大きく区分され、後者の特殊形而上学がさらに合理的宇宙論と合理的心理学と合理的神学の三つに細分化されるという〈伝統的な形而上学〉の区分法である。

たしかに、カントの『純粹理性批判』はこの区分に従って区分けされている。具体的に言えば、『純粹理性批判』全体は大きく「超越論的論理学」と「超越論的弁証論」の二つに区分けされ、スアレスの区分のいう、一般形而上学と特殊形而上学の区分に対応しているだけでなく、「超越論的弁証論」は合理的宇宙論と合理的心理学と合理的神学に対応している。ヘーゲルの弁証法的な学問体系がこの区分に対応していることは説明するまでもないであろう。まさしく、スアレスの存在の区分は、「すべての後に出でくる哲学にたいする前提を形作るの**である**」(Bd. 24, S.117)。

右の引用文の中で、「思索者 (Denker)」という、後々ハイデガーにとって特別に重要な意味が込められる表現が飛び出してくることは興味深い。もしかしたらこれがこの表現の最初の例ではないかと考えたくなるが、しかしこのことを断定するには余りにも用例が少なすぎるので、敢えてここではこれ以上踏み込むことはしないでおく。しかし、「思索者」という表現に特別に積極的な意味合いが込められていることは間違いない。その意味で、この出典は興味深い。

なお本節の最後に、スアレスと、近代哲学の「父」ルネ・デカルトとの関係を知る上で、『中世の哲学者たち』に収められた田口啓子の論文「フランシスコ・スアレスの存在概念」の次の言葉を紹介しておくことにする。

「スアレスはまが**いもなく近代哲学の父**（或いは祖父？）である。押しも押されもせぬ近代哲学の父、デカルトは、周知の通り、イエズス会経営のラ・フレーシュの学校でスアレスの哲学を学んだ。たとえ彼が何を言おうとも、スコラ哲学の基礎知識なしに『メデイタティオーネス』を読んで理解できるものではないし、さらに、スアレスの存在論を前提しなければ、その機微に立ち入ることはできない。デカルトの哲学はスアレスの存在論および認識論（人間論を含め）を先達とし、または踏み台として構築されている。」<sup>17)</sup>

イ、スアレスの『形而上学討論集』——存在 (esse) と存在者 (ens) という「根本的な区別」

それにしてもスアレスの『形而上学討論集』とはいったいどのような著作なのであろうか。興味深いので、その狙いと概略を簡単に見ておくことにしよう。

スアレスは「形而上学討論集」の執筆の動機を、著作の冒頭の「読者へ」の中で次のように説明している。

「私がかねてから、ものごとを把握し洞察するためには、ふさわしい方法によって探求し判断することが重要であると判断していたが、もし注釈者のやり方で哲学者〔アリストテレス〕のテキストに、ついでに偶然的であるように出てくるすべての問題を考察するならば、そのことをほとんど考慮することができないので、学説の内容的な順序に即して、この知恵の全対象に関して探求され、求められうるすべてのことを考察し、読者の眼前に維持するほうがより適切で有益であるとみなしたのである。」そして、著書の全体を見渡して、「初めの巻では、同じ対象の最も十全で普遍的な概念、すなわち存在と呼ばれる概念とその固有性ならびに原因が精密に考察される。……後の巻では、同じ対象〔存在〕の低位の概念を探求した。」と説明している〔内は小川〕。

以下、詳しく説明すると、次のようになる。

スアレスの『形而上学討論集』は全二巻、五十四の討論からなる。

まず、第一巻に収められた第一部(第一討論から第二七討論)は、「存在一般と諸特性」(communis conceptus entis ejusque proprietatibus)について論じる。つまり第一部では、存在一般とその特性が論じられるのである。その第一討論で、形而上学という学問のあり方が論じられ、形而上学とは、「実在的に存在する限りでの存在」(ens in quantum ens reale esse)、つまり存在一般を対象とする学問であると規定され、第二討論で、このような存在の概念について問

い、第三討論から第十一討論で「一性、真、善」、そして第十二討論から第二十七討論まで「原因」について論じる。つまり第一部では、伝統的な形而上学の区分で言えば、一般形而上学、ハイデガーの存在論でいえば、存在一般が取り扱われるのである。

続く第二巻の第二部(第二八討論から第五三討論)は、「特定の存在者の存在」について論じる。つまり、存在者一般が論じられるのである。具体的に説明すれば、第二十八討論で、すべての存在者の間には「無限なる存在者」(*ens infinitum*)つまり「神」(*deus*)と、「有限なる存在者」(*ens finitum*)つまり「被造物」(*creatura*)という根本的な区別があることが確定される。ハイデガーは言う、「存在者の第一の区分 (*prima divisio entis*) は、無限なる存在者 (*ens infinitum*) と有限なる存在者 (*ens finitum*) との間の区別である」(Bd.24, S.114)<sup>6</sup>と。第三一討論で、アリストテレスの範疇に即して「有限なる存在のあり方」(884)が論じられ、最終的にスアレスは「無限なる存在者」と「有限なる存在者」という根本的な区別を「最も基礎的な区別」(Bd.24, S.115)として確定する。第二部では、特殊形而上学、つまり存在者一般の存在が取り扱われるのである。

そして最後の第五四討論で、「本来形而上学の考察対象ではないはずの非実在的な思考上の存在」である「概念上の存在者」(*ens rationis*)<sup>6a</sup>が論じられる。

このように、スアレスの著作『形而上学討論集』の概要を辿るだけでも、スアレスの功績が鮮やかに見えてくる。簡単に説明すると、次のようになる。

スアレスは、著作を第一部と第二部の二巻に分けることによって、存在と存在者の区別を明確に打ち出すのである。

ハイデガーは存在と存在者との「存在論的区別」(ontologische Differenz)を主張して譲らないが、その主張の歴史的根拠は——その根源はアリストテレスの「形而上学」にあるとはいえ——スアレスの「形而上学討論集」にあったということになろう。

次に、スアレスが、第五四討論で、「本来形而上学の考察対象ではないはずの非実在的な思考上の存在」である「概念上の存在者」(ens rationis)——抽象的な存在概念——に触れていることも忘れてはならない。「スアレスは、遠慮がちだったにせよ、概念上の存在者もまた形而上学の対象であるということを示そうとした最初の人である。」(Bd. 24, S. 114) ハイデガーは、現存在の存在を忘却した存在として「眼前存在性」(Vorhandenheit)という概念を『存在と時間』の中で持ち出すが、これも歴史的にはスアレスに由来するといえよう。

さらに、右の概要だけでは見えてこないが、スアレスは、存在を何らかの方法で記述することが可能であるということもハイデガーに示唆している。ヘーゲルを論じる箇所では次のように述べている。このことは指摘されることが少ないだけに、殊更重要であると思えてならない。

「私は存在者のあらゆる規程においてすでに存在を前提している。存在は類ではない。存在は定義されることができないのである。しかしスアレスは、何ラカノ記述ニヨッテ明瞭にすること(declare per descriptionem aliquam)をつま<sup>り</sup>存在を何らかの記述によつて説明することだけは可能である」と述べている。」(Bd. 24, S. 118)

しかし同時にハイデガーは、スアレスがアリストテレスの「形而上学」の中に「欠陥」を見抜いたように、スアレ

スの「形而上学討論集」の中に致命的な「欠陥」があることも見抜く。すなわち彼は言う、「形而上学〔討論集〕の第一部は存在一般を取り扱うが、その際、どのような存在者がそこで共に思索されているのかは無関心なのである」（Bd.24, S.114）<sup>17</sup>。スアレスは第一部で、存在一般を取り扱うが、しかしその際、その存在一般を理解している人間の現存在の存在をすっかり飛び越し、忘れ去ってしまっていると、彼は指摘するのである。ここに現存在の存在の基礎的分析論という課題の必要性が持ち上がってくる、ということになる。

### おわりに——スアレスとハイデガーの存在の問い

フランシスコ・スアレスの数ある功績の中、特に彼の哲学的功績、とりわけ存在論に関する彼の功績に光を当てたい、というのが本論の狙いであった。その功績を知るためにわたしたちはジルソンやハイデガーの記述を手掛かりに論を進めてきた。

ジルソンによれば、スアレスは古代の存在論を否定しながらも、キリスト教の教説にしがみついており、その意味では他の中世の哲学者たちと少しも変わらないというのであった。これに対して、ハイデガーはスアレスの著書「形而上学討論集」を西欧的存在論の歴史の只中に位置づけ、これを「經由して」と形容するだけでなく、この書物こそ、アリストテレスの「形而上学」を「完結した体系」にもたらし、この形而上学区分によってカントやヘーゲルに至る近代哲学の前提が切り開かれたのだとスアレスの哲学的功績を高く評価する。その意味で、まさしく、「スアレスこそ、近代的な哲学にもっとも強く影響を与えた思索者（Denker）なのである」（Bd.24, 112）



しかし、スアレスの哲学的功績はこうした存在論の歴史の中だけに留まるわけではない。ハイデガーの存在論（＝哲学）の中にも様々な形で生きている。枚挙すれば、次のようになる。

スアレスの著書「形而上学討論集」の区分、すなわち、「存在」と「存在者」の区分は——もちろん、その根源はアリストテレスの「形而上学」に遡るのであるが——そのままハイデガーの「存在論的区別」という考え方の歴史的根拠となつたことは間違いない。さらに、スアレスが第五四討論の中で「概念上の存在者」(ens rationis)——抽象的な存在概念——を持ち出していることも忘れてはならない。ハイデガーの「眼前存在性」(Vorhandenheit)の歴史的根拠は、スアレスのこの記述にあるともいえよう（もちろん、そのように断定するには出典が余りにも乏しいが）。そして、スアレスの、「何ラカノ記述ニヨツテ明瞭ニスルコト (declarare per descriptionem aliquam)」(Bd.24, S.118)という文言も忘れてはならないだろう。存在は、何らかの方法で記述することが可能なのである。これはもちろんハイデガーの存在論の確信となる。しかし同時に、スアレスにも、アリストテレスとは違った意味で、「欠陥」が認められるという指摘も大切である。その欠陥とは、スアレスが、存在一般を論じながらも、その存在一般を理解している当の人間の現存在の存在を忘却し、そのことにまったく気付いていないということであるとすれば、存在一般を理解している現存在の存在から出発すれば、新しい存在論が着手され、そして新しい存在論の歴史が始まるのではないだろうか。私は、ハイデガーが講義中に漏らした、「自立的な構築」(selbständiger Aufbau)という言葉にそうした彼の新しい存在論への意欲のようなものを読み取りたい。

## 注釈

- (1) 世界大百科事典第十六巻「スアレス」(平凡社、一九七二年、三三三頁)、同事典第八巻「グロテイウス」(同、五五三頁)の項目を参照。
- (2) ホセ・ヨンバルト・桑原武夫『基礎法学叢書6、人民主権思想の原点とその展開——スアレスの契約論を中心として』一九八五年、成文堂、伊藤不二男『スアレスの国際法理論』有斐閣、一九五七年、さらに哲学者としてのスアレスに関する論文・翻訳として今道友信・中山浩二郎・箕輪秀二・有働勤吉篇『中世の哲学者たち——中世存在論の系譜——』一九八〇年思索社と上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成20近世のスコラ学』二〇〇〇年、二〇〇五年初版第二刷。
- (3) E・シルソンの『中世哲学の精神上』(服部英次郎訳、筑摩叢書、一九七四、一九七九第三刷、一一四頁)。
- (4) 同書、一一三頁。
- (5) 同書、一一二頁。
- (6) 同書、一一二―一三頁。
- (7) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927, 1967, S.22.
- (8) *ibid.* S.39.
- (9) 拙論「幻の書評から『存在と時間』の成立へ」秋富克哉・関口浩・的場哲朗『ハイデガー『存在と時間』の現在』(南窓社、二〇〇七年)所収を参照のこと。
- (10) 新村出編『広辞苑』岩波書店、第二版補訂版、一九七七年。
- (11) 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫『岩波国語辞典第二版』岩波書店、一九七三年。
- (12) 原佑・渡辺二郎『存在時間Ⅰ』中公クラシックスW 28、中央公論社、二〇〇三年、五八頁。
- (13) Martin Heidegger, "Being and time" Translated by John Macquarrie and Edward Robinson, oxford, Basil Blackwell, 1973, P.43.
- (14) Martin Heidegger, Band 23, *Geschichte der Philosophie von Thomas von Aquin bis Kant*, Vittorio Klostermann, 2006.
- (15) Martin Heidegger, Band 24, *Die Grundprobleme der Phänomenologie*, Vittorio Klostermann, 1975.
- (16) 上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成20近世のスコラ学』二〇〇〇年、二〇〇五年初版第二刷、八八二―三頁。
- (17) 田口啓子「フランシスコ・スアレスの存在概念」今道友信・中山浩二郎・箕輪秀二・有働勤吉篇『中世の哲学者たち』所収、思索社、一九八〇年、二六八―九頁。

(18) 上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成20 近世のスコラ学』二〇〇〇年、二〇〇五年初版第二刷、八八三―四頁。  
(19) 同書同頁。

(本学法学部教授)